

吸血鬼の妹様

キーマカレー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは夢だ。そんな現実逃避をしても意味もなく、吸血鬼のいいなりになる男の話。

常識を持つが、非常識を知らない男と、非常識な存在で、常識を知らない少女。そんな二人の命をかけた(男の命)生と死のストレスを進んでいく物語。

※かなりのキャラ崩壊を含んでいます。ご注意ください。

目次

一話	現実	1
二話	気持ち	6
三話	魔法	10
四話	絶句	14
五話	助け	18
六話	夜中	21
七話	恐怖	24
八話	十二力	28
九話	濁り	31
十話	滴る血	33
十一話	朝	36

一話 現実

夢か現実かがわからなくなるなんて初めだった。薄暗い部屋の中で目の前に広がる光景に目を疑っていた。

無数に落ちている肉片に、先程までちゃんと命が宿っていた死体。そして、目の前でまだ生きている人が苦痛を叫ぶ悲鳴をあげながら、金髪の少女に腹を食い千切られている光景。

「え、え………?」

まだ状況を理解出来ていなかった。震える手を押さえながら部屋の隅で怯える。情けないと思いつつもただひたすら恐怖に怯えなければならなかった。

「う、うああああああ!!」

突然、隣にいた中年の男性が立ち上がり、少女の方に走っていった。自ら死に行くのかと思ったが、すぐにその男の目的が分かった。

少女のすぐ隣に古い木の扉がひっそりと佇んである。きつとその扉に向かってるのである。

このままではいずれ死ぬと判断したのか。しかし、その男の希望は絶たれた。

「——ツ!?!」

俺の目の前で男の首が飛んだ。その頭は勢い良く飛び、血を巻き散らかして回転しながら俺の隣にコロコロと転がってきた。ギロチンかなにかで一瞬で切ったのかと思わせるほど綺麗に切られている首から、大量の血が溢れ出て真っ赤なカーペットに染み込んだ。

こんな物を見て気持ち悪くならない筈がなく、吐き気が込み上げ、その吐き気を抑えるように手で口を押さえた時、耳元から少女の声が聞こえてきた。

「もお………。嫌いから黙っててよお」

幼い子の声でこんなにも恐怖心が込み上げるだなんて自分でも思わなかったが、今の自分は全身が震えて声すらまともに出そうになかった。

「あれ、この人もう死んじゃったの?」

少女は男の首を持ちながら俺に聞いてきた。なぜよりによって俺に聞いてくるのかと思つたが、周りを見ると一瞬で理解できた。

この悲劇が始まる前は六人程いたのだが、もう生き残っているのは自分しかいなかった。

「あ……あ……」

答えようにも声が喉に引つ掛かかり、声が外に出ない。この姿に苛立ちを覚えた少女は顔をムツとさせると、持っていた男の頭を壁に向かって投げつけた。その頭は一直線に飛んでいき、壁にめり込んだ。潰れるような音を立てた後に赤色の液体が垂れ、ゆつくりと床に向かって血が垂れだした。

「ねえ、答えてよ」

「あ……あ……」

「あれ、この人間も壊れちゃつたのかな」

と言うと、少女は俺の目を覗きこんできた。

今初めて少女の顔を確認したのだが、少女の顔は西洋人形のように整っていて、ナイトキャップと呼ばれる帽子の下に覗かせている金髪と、深い紅色の目が酷く魅力的だった。

「なくんだ。まだ壊れてないじゃん」

嬉しそうな表情にすると、少女は俺の前に座り込み、何かを考え出した。

抵抗すら出来ない様な気がしたので、死を覚悟しながら少女を見つめていると、目に不思議な物が映りこんだ。小さな体を左右に揺らしながら何かを考えている少女と一緒に、何個もの宝石のような物が少女と一緒に揺れているのだ。部屋が暗くてくつきりとは黙視できないが、確かに少女の背中から木の枝のようなものが伸びていて、その下に宝石のような物がぶら下がっているのだ。

飾りか。最初はそう思った。だが、少女の狂った行動と、あの力。そしてこの奇妙な羽。どこからどう見ても人間には見えなかった。

そう、きつと彼女は人なんかじゃない。あれは化け物だ。ここで一つ、小さな希望が見えてきた。これはきつと夢なんだと。そう思うと緊張が少しほぐれて、小さな笑い声が出てしまう。

「ふふっ……はははっ」

なんだか全てが馬鹿らしくなってきた。普通に考えてこんなことが起こるはずないじゃないか。馬鹿だなあ。最初から気が付けることだろうに。

早くこの悪夢から覚めたい。そう思っても中々覚めない。目の前の少女は不思議そうな顔をこちらに向けていた。

「貴方大丈夫？」

殺人鬼に言われたくはない。夢だと分かった瞬間、なんだか目の前の少女に恐怖という感情が出てこなくなった。

「ああ、大丈夫だ」

「なら私と遊びましょう？」

「それは無理なお願いだ。今から起きるんでな」

「何を言っているの？」

「だから……」

ふと思ったのだが、夢ってここまでリアルだっけ。夢は確か必ずどこかに違和感や矛盾があるものだが、人の肉片から、部屋の中にある家具。どれも違和感なんてない。しかも鼻の奥にこびりつくように臭う悪臭。

思い返してみると目の前には有り得ない存在がいて、聴覚、視覚、嗅覚、全てがはつきりとしたこの場所。

考えれば考えるほどこれは夢なのか現実なのか分からなくなってくる。こんな姿を見ていた少女は、小さくため息をつく、小さな口を開いた。

「可笑しな人。壊しちゃいまシヨウか」

ゾワリと体に伝わる殺気。身体中を舐め回すようなプレッシャー。先程の少女とは違う存在とも思えるほどの存在感を放っている彼女を前に、先程まで感じていなかった恐怖心がまたジワジワと沸いてきた。

「や、やめてくれ！お、お願いします。殺さないで……」

ジリジリと迫ってくる化け物に必死に命乞いをする。

少女が近づいてくることに心臓が羽上がり、身体中に心臓の響きが

伝わり始めた。

「殺さないでって、貴方面白くないもの。それに叫びまわってる姿を見るとゾクゾクして楽しいの」

「……………な、何でもしますから、命だけは、助けてください」

「ふうくん……………何でも、ね」

どこか楽しそうに答える少女。まるで玩具を買ってもらったばかりの少女のようだ。

「まあ、お腹はもう満たされたし、殺さないであげる」

「ありがとうございます……………」

「助かったんだからもっと喜んでよ。ね?」

「はい……………」

何かが氣にくわなかったのか少女はムツとすると、俺の手を取り、人差し指を思いつき握りつぶした。

「あ”あ”あ”あ”あ”あっ!!?」

一瞬気が飛びそうになるも、すぐに氣を取り戻し、直ぐに自分の指を見た。人差し指は力なく垂れており、不気味な形をしている。

涙を大量に出しながら少女を見た。目の前が滲んで良く見えないが、少女が笑っているのは分かった。

「ほら、もっと嬉しそうに感謝の言葉を言つてよ」

「あ、ありがとうございます」

痛みを耐えながら無理やり笑みを作る。今自分がどんなに酷い顔をしているのかは分からないが、助かるには少女の言うことに従うしかない。

「ふふふつ。じゃ、じゃあ次はね……………」

次の指令を言おうとした瞬間、部屋の奥の扉が軽いノックと共に静に開いた。

「妹様。朝食をお持ちし——ツ!?!」

扉から朝食と思われる物をお盆に乗せて持ってきた銀髪のメイド姿の女性は、この部屋の光景を目の当たりにし、驚愕した。

「い、妹様!?!、これはいったい……………」

「これって?この人達は咲夜が私にくれた物じゃないの?」

「そ、そんな筈あるわけないです！」

「だって目覚めたら部屋に沢山いたし。てつきり私にくれた物かと……」

鼻を押さえている咲夜と呼ばれたメイドは、部屋を見渡し、俺の存在を目にすると口を開いた。

「妹様。その方を少し貸して貰えないでしょうか」

「えく。これ私のだし」

「す、少しで良いので」

「むくわかったよお……」

「妹様。ありがとうございます」

メイドの頼みで折れた少女。自分の命が助かったと心から思うも、次の言葉で自分の絶望的な未来が見えた。

「でも、返さなかったら壊スカラね」

「は、はい。では」

きつと俺はもう助からないのであろう。それにメイドは少女を妹様と言っていた。上下関係があるため、必ず俺は化け物の元へと返却されるだろう。そんな事を思っていると、薄暗かった部屋からいきなり広く長い廊下が変わった。自分の身に何が起こったのかと戸惑いが出てくる時、あのメイドが話しかけてきた。

「少し宜しいでしょうか」

細身の長身で、背は俺より少し小さい位。銀髪に綺麗な肌。青い瞳をした彼女はとても凛々しい。

「貴方は自分の身に何が起きたか理解していますか？」

「えっと……それはどういう」

戸惑っている俺を見て、ほんの一瞬考える素振りをすると、直ぐに口を開いた。

「聞き方が少しまずかったですね。では、もう一度聞きます」

彼女は俺の目を捉え一呼吸置くと、俺にこう告げた。

貴方はどうやってあの部屋に行きましたか？

二話 気持ち

「何時からと言われても分からないです。気がついたらさっきの部屋にいて……ッ！」

「あら、どうしました？」

「指がやられてしまいました」

感覚こそもないが、絶え間なく痛みが響き渡る。右手の人差し指は完全にやられていて、酷く腫れ上がっていた。

「先に手当てをしておいた方が良さそうですね」

そういうと、メイドはその場から一瞬で消えて、数秒後に姿を現した。何が起こったのかと目を点にしているとメイドは苦笑し、いいですかという、一呼吸置いて説明を始めた。

「二つ話しておきたい事があります。それは、恐らくここは貴方の住んでいた世界ではないということ」

「世界が違う？」

「はい」

手慣れた手つきで俺の右手を応急手当するメイド。窓から差し込む太陽の光が、彼女の顔を明るく照す。

「世界が違うというより、住む場所が違うと言った方が宜しいですね。この世界とはある結界によって貴方のいた世界から隔離されています。そしてこの世界には人間の他に妖怪、神、妖精など様々な種族が住んでいる。……ここまで大丈夫ですか？」

「……信じがたいけどな」

「それでは、説明を続けますね。此処は結界によって隔離されると先程言いましたよね？ですから、外から此方の世界の存在は知られることも無く、入られる事もないです。しかし、とある条件によって此方の世界に入ることができます。それは結界を管理している二人の存在が結界を弄るか、結界が何らかの原因で歪み、その歪みによって此方の世界に来るか。」

長々と話続ける彼女は指の応急手当が済むともう大丈夫と小さく呟き、俺の手を優しく撫でた。

「他にも此方に入る方法は存在するのですが、私の考えでは貴方はきつと後者の方で此方の世界に来たのだと思います。それで一つ聞きたいのですが、貴方が外で最後に見た光景はどうでしたか」

「最後に見た光景……」

途切れ途切れの記憶をたどり、最後に見た景色を思い出す。たしか秋の紅葉を楽しむためにガイドと一緒に歩いて……。

「朝早く集団で紅葉を観光しようとしていました」

「それであんなに沢山……。それにしても謎が多すぎますね」
「謎？」

「ええ。まず貴方に怪我を負わせた少女、妹様は精神が不安定な方でして。でも、狂気が妹様の精神を犯しても、普段なら自分で押さえられるのですが……。先程のは異常でした。なにが原因で……。それともう一つ。何故あのような所から此方の世界に来たのか」

「そちらの事情は良くは分かりませんが、あの子は普段あんなことしないって事でいいんですよね？」

「ええ。誓って妹様はあのようなことはしません」

朝ということもあるのか、冷たい風が横切った。今の季節は秋と言っても、そろそろ冬が近づいてきている。まさか紅葉を楽しみたいという感情が死をもたらすとは。

「では、行きましようか」

「何処に？」

「この館の主、お嬢様の所にです」

そういうと、彼女はゆっくりと歩き出した。その後について歩いていくが、一つどうしても聞きたいことがあった。

「あの」

「はい、どうなされましたか？」

「名前……」

忘れていたのか、ああという表情をする彼女。

「申し遅れました。私の名前は十六夜 咲夜 と申します」

「俺の名前は 田中 桂 っていいいます」

「宜しくお願ひしますね。桂さん」

あれ、私は何であんなことをしていたんだっけ。

ふと、自分の体を見る。身体中を血塗れで、足や服には血が飛び散った後があり、手にいたっては真っ赤だった。部屋中全てに血の後があり、人間の死体が転がっていた。腕がない者、足がない者、首から上がない者、人の形すら保っていない肉片。

こんな事をする気なんてなかった。私は別に人を襲いたい訳じゃない。ただ、ただ、遊びたいだけなのに。

何でこんな事になってるの？

何で私はこんなことをしてしまったの？

何で私は楽しんで殺していたの？

絶え間なく沸き出る疑問と後悔が入り交じり、絶望に生まれ変わる。

何時もは抑えられていた狂気が抑えられなかった。

不意に目から大粒の涙を流していることに気が付く。これじゃあ、外には出られない。このまま外に出たら同じ様な事をしてしまう。私は外に出てはいけない。

「うっ……ひっく……ひっく……」

止まることのない涙を流し続け、転がっている死体に謝った。何回も、何回も。返事が返ってくる訳でもなく、それで後悔が消えることもなく、ひたすら無くなることのない絶望が心で渦巻いていた。

「あの人は無事かな？指は大丈夫かな？」

先程の記憶が蘇る。その時自分がしてしまった行動が脳裏に焼き付き、その事ばかり考えていた。きっとあの人は辛い想いをしているだろう。肉体的にも、精神的にも。

私は生きていていい存在なのかな。

そんな考えが頭の中に浮かんできた。狂気を抑えられない子なんて最初からいない方が自分のためにも、人のためにもなるのではないか。

溢れる涙が未だに流れ続けていて、胸の奥底から熱い想いがジワリジワリと心を蝕んでいくのを実感した。

私はこれでも四百年以上は生きている。でも、今日ほど自分を殺したいと思つたことは今まで一度もなかった。

私は自分を殺したい。でも、そんな勇気なんてない。

私は死にたい。でも、生きていたい。

自分の中で自問自答していく中で産まれる矛盾。私はいつたいううしたいのだろうか。

私は生きたい。私は楽しく生きたい。人を愛したい。愛されたい。そう、私は誰かに助けてほしいんだ。でも、助けてくれる人なんて居るのかな。

溢れていた涙は流れの激しさを無くし、最後の一滴が頬をゆつくりと流れていった。

「お願い。誰か私を助けて」

「誰にも聞こえる筈もなく、少女の願いは部屋の中で小さく響き渡るだけだった。」

三話 魔法

「と言う事は、さっきの子は吸血鬼なんですか？」

「ええ、その通りです」

ある程度の情報を咲夜さんと交換しあい、だいたいの事を知ることができた。この屋敷は吸血鬼の主が納めていると言うことと、先程の少女はこの主の妹であるということ。

「この主の名は レミリア・スカーレット。圧倒的なカリスマの持ち主で、私はお嬢様のメイドをさせて貰っています」

「それじゃあ、さっきの子の名前は？」

「フランドール・スカーレット。普段は無邪気でもとても可愛らしいんですよ。中々時間がとれなくて遊んであげることがあまりできないのですが・・・」

表情を曇らせる咲夜さん。まるで子を心配する母親のようだった。

赤いカーペットが敷かれた長く広い廊下を突き進んでいくと、左側に階段が見えてきた。木製でできた手すりを掴みながら、大きな階段を一つ一つ登っていく。その間も咲夜さんと話ながら歩き、話が終わる頃には広いホールに出た。ホールには豪華な彫刻やら、大きなシャンドリアやら、凡人が目にするのではない様な物が沢山置かれてある。

「それでは此方です」

「分かりました」

話すことが無くなり、少しの間静かな空気ができてしまったが直ぐに目的の場所に着いたようで、一つの大きな両開きの扉の前で止まった。二人で顔を頷かせ、無言で扉を開ける咲夜さん。重い音が響き渡り、音が止む頃には部屋の中が露になっていた。

広く冷たい空気が漂う部屋。部屋の奥には大きなステンドグラスがあり、その下には金色の装飾を施した赤く大きな椅子が一つだけ置いてあった。

「お嬢様。お待ちせいたしました」

「ええ、ご苦労」

豪華な椅子に腰かけていた人物が軽い腰をあげ、此方に歩み寄ってきた。主にしては幼すぎる見た目をしている少女。最初に見た少女と似たようなナイトキャップを被っており、その下に水色がかった青髪が覗かせていた。レースのついたピンク色のドレスを着た少女の背中には、大きな蝙蝠の様な羽が生えていた。

「いらっしやい、紅魔館へ。そしてようこそ、幻想郷へ」

頭が一つ以上離れている背丈の少女は、その見た目と合わず、大人びた声質に口調をしている。まるで長い月日を生きてきた者のようだった。

「説明は聞いてあるだろうけど、一応名乗っておきましょう。私の名は レミリア・スカーレット。覚えておいて損は無いわよ。貴方とは長い付き合いになりそうだからね」

「俺の名前は田中 桂 と言います」

「けい……桂ね。覚えてたわ。」

彼女は俺の名前を覚えるように数回眩くと、一呼吸置き、此方を見上げてきた。あの少女と同じ真紅の目と目が合う。

「それで、桂。貴方はこれからどうしたい」

急にこれからの事を聞かれ、少し息が詰まってしまふ。今日は朝から散々な目にあつて、そんな事を考える暇なんてなかった。彼女を目の前にして、どうしたらいいのか分からず、俯いてしまふ。

「……すみません。分からないです」

「フフツ。そりゃそうだ。散々な目にあつて混乱しているのに後の事は考えにくいか。まあ、そんなに考えるな。お前の未来は私が保証しよう」

自信満々で返答され、少し驚いてしまふ。驚きが自分の顔に出てしまったのか、レミリアさんは口元を釣り上げて笑った。

「咲夜。まずは桂を図書館に行かせてパチエに会わせて頂戴。事情はもう既に話してあるから」

「かしこまりました。お嬢様」

レミリアさんは先程話した事を、もう既に誰かに話しておいたと言っていた。いったいどうすればそんな事が出来るのだろうか。も

しかして咲夜さんが言っていた能力というヤツだろうか。咲夜さんは時を操る能力を持っているらしい。その能力を使っていきなり現れたり、部屋から廊下に俺を移したらしいが。

「それでは行きますよ」

という俺が返事もする間もなく、周りが全て本棚で埋め尽くされた部屋に移された。目の前には自分の身長は何倍もあると思われる本棚。しかも隙間なく厚い本で埋まってある。どれも古い本なのか、アンティークを漂わせる本ばかりであった。本棚の本を眺めていると、本棚の陰から何者かが出てきた。

「あれ、咲夜さんじゃないですか」

「おはよう、小悪魔」

本棚の陰から姿を現したのは、腰まで届くストレートの赤髪の少女だった。しかし背中には、レミアさんの様な大きな羽が生えており、厚い本を四、五冊両手で抱えながら宙を浮かぶ様子から、人間ではないということが明確だった。

「どうされたんですか？それに隣の人は……」

「少し問題があつてね。それと、隣に居るのは桂さんよ」

「問題……？そういえば朝早くからパチュリー様が忙しそうにしてましたね。それと何か関係が……？あ、それと桂さん。宜しく願いますね。」

何かオマケ扱いされた気がしたのだが……。

それでは、という小悪魔と呼ばれた赤髪少女は、飛んで何処かに行ってしまった。

「桂さん、此方にどうぞ」

咲夜さんに言われるがままに本棚の間を通過して突き進んでいくと、大きな机に沢山の本が置かれ、椅子に腰を掛けて大きな本を読んでいる人が見えた。ロングの紫髪に、三日月のアクセサリが付いたナイトキャップを被っている。

「パチュリー様。お連れしました」

「お疲れ。丁度準備が終わった所よ」

「準備？いったいなんの？」

色々理解できていないため、疑問を口に出してしまった。その疑問に対して紫髪の人は

「貴方は黙って言われた事をなしとければいい」

と言われ、渋々彼女達の話の聴くことにした。

「では早速お願いしますね」

「わかってるわ。その人、此方に来て」

「は、はいー!」

言われるがままに彼女の元へと行くと、床に何かが書かれてあるのが気が付いた。白い何かで書かれたそれは、円上で良く分からない文字が大量に書かれた魔方陣だった。

「此処に立ってて」

指をさされ、素直にその場に行く。ちょうど魔方陣の真ん中だ。いまから俺は魔法でもかけられるのだろうか。こんな状況で少し楽しみにしている自分がある。

「それじゃあ、始めるわよ」

突如彼女の周りに不思議なオーラの様なものが現れた。それは次第に魔方陣に流れていき、白く書かれた魔方陣は、淡い青に光輝いた。彼女が何かを唱え始める。その声はとても小さく、ボソボソと早口に呟いていて、何を言っているのかさっぱりだ。

「ふう………」

突如光が消え伏せた。詠唱が終わったらしい。体には何も違和感はないが、いったい何の術だったのだろうか。

「これでこの人の能力は一時的に封じたわ。後は宜しく」

「お疲れ様です。パチュリー様」

自分の役割を終えた彼女は俺の顔を見て「頑張って」と小さく呟くと、椅子に座り込んでまた厚い本を広げた。

「桂さん」

「はい、何でしょう」

「行きますよ。妹様の所に」

四話 絶句

「行きますよ。妹様のところに」

「……………え？」

俺はまたあの地獄に連れていかれるのだろうか。普段あのよな事はしないらしいが、どうしてもあの光景が頭から離れない。今度俺が彼処に行ったら俺の気が狂いそうだ。

「あの、今行ったらサクツとやられちゃうんじゃない……………」

「大丈夫よ。命の保証なら私がするから」

数十分前に知り合った人に言われても信用がまるでない。あんな光景を見て命を保証するなんて言われても、信じたくても信じられないのだ。

「さあ、行きましょう。貴方に伝えておきたい事もあるので」

伝えておきたいこと？まさか俺の死亡予告だろうか。

とりあえず咲夜さんの目付きが鋭くなったからついていく事にしよう。

「咲夜さんの能力で行かないんですか？」

「伝えておきたい事を歩きながら話そうかと思いましたが」

大図書館を後にし、また広く長い廊下に出た。廊下を歩いているとある疑問がでてきた。この大きな館ならもつと住人がいてもいいはずなのだが、俺はこの館に来てまだ数人しか会っていない。まだ朝だから皆寝ているのだろうか。

「では、そろそろ話しましょうか」

廊下の突き当たりを左に曲がり、この屋敷と若干造りが異なる階段の入り口に着いたとき、咲夜さんは口を開いた。下へ下へと螺旋状に続く石造りの階段を降りながら、咲夜さんは先程図書館で何をしたかを語り始めた。

「パチュリー様には桂さんの持つている能力を封じさせました」

「俺が持つている能力？」

「ええ。妹様が異常な行動をした原因が、貴方の持つている能力だと思われるからです」

「ちよ、ちよつと待ってくれ」

どういうことだ。俺はただの一般人。そんな俺が能力なんて持っている筈がない。それに俺の能力のせいで、あの少女を狂わせてしまっただど？もし仮にそれが本当なら、死んでしまった人を殺してしまったのは俺……!!?

「そ、その根拠はあるんですか？」

「いえ、まだ決まった訳ではありません。貴方の能力が何なのかが分かりませんから」

「その前に少しいいのですか？何故俺が能力を持っている前提なんです？」

自分が人殺しと認めたくないせいなのか、自分でもわかるくらい熱くなっている。

「その事ならお嬢様が確認いたしました」

「レミアさん？」

「お嬢様の能力は運命を操る事ができます」

運命を操るって、それなら何でも出来てしまうのではないのだろうか。その能力さえあれば全てを思い通りにできる。

「運命を操ると言ってもあまり具体的にはできないようですが。お嬢様によると、運命を操るといふのは沢山ある未来の中から、自分が望む未来にするためにその運命の中で起きている事を実行して実現できる物らしいです」

「それで俺が能力を持っている事が見えて、レミアさんが望む運命の中で俺の能力を封じていたって事ですか？」

「そういうことです。でも運命は断片的にしか見えならしく、確実という訳でもないらしいです」

何か使い勝手良さそうで悪そうな能力だなあ。どっちにしろ自分の望む運命にするためには能力保持者が力を持っていて、その人のために動いてくれる仲間が必要って事なのかな。

「二つだけ気になったんですが、俺の能力が何なのかは分からないのですか？」

「それは自分自身にしか分からないものですよ。きっと時間が解決

してくれると思います」

「……もし本当に俺の能力のせいなら、俺は取り返しのつかない事をしてしまったんですね。人を殺して、あの子を傷つけて……」

「そんなに思い詰めないでください。誰も貴方を責めませんよ。桂さんだって悪気は無いわけですし、妹様も殺そうとしてやった訳でもない。亡くなってしまった人達は本当に残念ですが、きっと分かって貰えますよ」

話すこと数分、俺はやつと決心した。あの子にあつたらまず謝る事を。

石造りの螺旋階段を下りていき、肌寒さを感じる頃には木製のドアの前に着いた。きつとこの先に彼女がいるのだろう。

「妹様、失礼します」

静かに部屋の中に入る咲夜さんの後に続く。部屋に入って一番先に感じたのが、鼻の奥にこびりつくような悪臭。この臭いの元が、生きていた人の物だと思うと、申し訳ないという気持ちでいっぱいになる。

薄暗い部屋の中央で踞る少女。身体中真っ赤で、その少女の周りには肉片が転がっていた。咲夜さんに背中を押され、数歩前に出てしまう。途中、足の方からピシヤリと何かを踏んだ音が響くが、気にせず前に進む。

少女との距離は後三メートル程。少女に近づくと鼓動が早くなるのを感じる。

「ちよつといいかな」

声をかけると少女は身体をピクリと動かし、顔を伏せたまま「何……」と今にも消えてしまいそうなほど小さな返事をした。

「君に謝りたいんだ」

「なんでそんなことするの？」

顔をゆつくりとあげた少女は俺を見上げて答えた。俺はそんな少

女の姿を見て絶句する。

光のない目は、全てを闇に放り込みそうなほど深く、絶望に満ちた表情をしていた。

俺はそんな少女を見て何も言えなかった。

少女を見てこんなにも心を締め付けられるほど苦しくなるなんて。

五話 助け

「君にこんな行動をさせてしまったのは俺のせいなんだ」

「……………どういうこと」

光の灯らない虚ろな目を見ることのできなかつた俺は、ただ俯きながら重い口を開いた。

「俺には能力があるらしいんだ。その能力のせいできつと君を可笑しくしてしまっただと思っ」

「……………何を言っているの？この人達は私が殺しちやっただよ!?!」

響く少女の叫び。虚ろな目から溢れる涙は、彼女の溜め込んだ辛い気持ちを全て吐き出すかのようにボロボロと少女の頬を滑り落ちた。

「この女の人も!!この男の人も!!みんなみんな私がこの手で殺したんだよ!!」

少女は俺を睨み、一瞬で目の前まで移動してきた。俺の目の前に現れるまでに物音一つもたてずに、まるで瞬間移動でもしたかの様な早さだった。そして、驚きの声をあげる間もなく突き飛ばされた。

飛ばされた俺の体は壁に打ち付けられ、背中からの激痛に耐えれずに声をあげてしまう。

「ほら、また私が人を傷つけた」

俺を見下ろしながら少女は笑っていた。でも、それと同時に目から涙が先程よりも多く頬を滑った。

「この子……………まさか……………」

「私が人と関わるところなっっちゃうんだよ。だから、だから、お願い……………もう私に関わらないで」

金髪を揺らしながらその場に崩れ落ちてしまう少女。両手で顔を隠し、鼻をすすする音が聞こえた。

「ごめん。それはできない」

少女は覆っている手をどかして、俺を見上げるようにして睨んだ。

少女は敵視するように桂を見るが、桂は逃げる様子もなく、恐がる様子もなく、目から涙をこぼしていた。

真つ赤に染まった部屋で行われているこの二人の言い争い。それを見守るようにして部屋の隅でこの様子を眺める咲夜は、拳を固く握りしめて二人の行方を見守った。

「もう、関わらないでだつて?・・・そんな事できる筈がないよ」

少女の隣に座り込み、少女の小さな手を握りしめる。

「俺は君に償いをしないといけない。だから、もう関わるなって言われても無理だよ。それに、そんな助けを求める目で見られて黙っていられる筈がない」

驚きの顔をする少女。大きく目を見開いたその先には、黒髪の少年が笑顔で目を見つめていた。

「あ・・・ああ・・・」

嬉しさのあまり、少女は声が上手くだせずただひたすら、目の前にいる自分を救ってくれた人に抱きついた。今度こそ壊れないように、優しく。

少女の寝息が聴こえるまでそう長くはなかった。きつと疲れたのだろう。

「あの、咲夜さん。この後は?」

「私はこの部屋をどうかします。貴方は妹様を責任もって見守っていてくれませんか?」

「・・・分かりました」

「では・・・」と咲夜さんが呟くと、瞬時に風景が変わった。本棚にタンス、真つ白のシーツのベッド。家具から察するに客室か何かだろうか。ベッドの直ぐ隣にある窓には、少し厚めのカーテンがしてあり、窓の下にある小さな円上のテーブルには、紙切れが一枚置いてあった。

”カーテンは絶対に開けないように”

何故かは察しがついた。この子は吸血鬼。日光が一番の天敵。それくらいは言われなくても分かっていた。

抱っこしながらでも寝続ける少女は、羽を揺らしながら一定の早さで寝息をたてていた。今さらなのだが、少女の体や服、どこを見ても血や汚れなどが見つかからない。咲夜さん、仕事がはやいです。

せっかく綺麗治しても、すぐに汚しちや悪い。そう思い、ベッドに寝かせる事にした。少女は綺麗でも、俺の服が所々赤い。

少女を寝かせるためにベッドの隣に行き、少女の細い体に腕を通して寝せようとした時、あることに気が付いた。少女は腕を両方とも背中まで伸ばして手を組んでいるため、中々少女をベッドに寝かせることができない。流石人間ではないだけあるのだろうか。本気で力を入れて離そうとしてもびくともしない。

「しようがない」

少女を抱き抱えたまま、ベッドに寝込んだ。流石にずっと抱っこしているのも辛いものがある。しかも今日一日、肉体的にも精神的にもどっと疲れた。

「少し横になるだけ……」

横になった瞬間急に出てきた睡魔に抵抗せずに、そのまま目をゆっくりと閉じた。

六話 夜中

ぼんやりとした気だるさを感じながら目が覚め、体の感覚も冴えつつある時、自分の体に何か抱きついていてる感覚が感じられた。目に入ったのは少女の綺麗な金髪。俺の胸に顔を埋めているせいか、胸辺りからほんのりとした温かさを感じる。身体を起こしたいのだが、このまま身体を起こすと少女の眠りを妨げてしまいそうだ。かといってこのままの状態にいるのも辛いものがある。

少女が起きるまで待とうかと思いい、暇潰しに首だけ動かして部屋を見渡すが、寝る前と全く変わっていないため、何の面白みがなかった。今の時間を確認しようにもこの部屋には時計がなく、窓も分厚いカーテンで遮られているため、今の時間帯を知ることすら出来なかった。何の変わりもしない部屋を眺め続けて十数分。やっと少女が目覚めたようだ。

「ん………あれ」

小さな声でボソボソと呟くと、少女は顔をあげた。そこで俺と目が合う。目があった瞬間、「あっ」と声をあげると頬を少し赤くした。寝る前の事を思い出したのだろうか。

「良く寝れた？」

「………うん」

「起きられる？」

「………うん」

まだ気分が冴えないのか、あの時の事を思い出しているのかはわからないが、多分あの時の惨劇を思い出しているであろう。こんな時、どういう声を掛けてあげれば良いのだろうか。産まれて今までこんなことが無かったため、どんな風に接すればいいか悩んでしまう。

不意に少女が俺の体を抱き締める力が強まり、少女の心臓の音が伝わってきた。

少女に抱かれたまま身体を起こす。少女の体が軽いためか、すんなりと起き上がることができた。寝ている時に外れてしまったのだろうか。ナイトキャップをベットから取り、少女の頭に被せる。

「そろそろ離れられそう?」

「……まだ」

「無理しないでいいからな」

あのパチュリーって言われていた人が俺に魔法みたいな物をかけてから、少女は異常な行動をしなくなり、今はこうして二人で一緒にいられる。咲夜さんが言っていた通りなのだろう。俺には人を可笑しくしてしまうような能力を持っているという事が。そう思うと急に自分に殺意が沸いてくる。自分が原因で人が死に、他の人達にも迷惑をかけた。そして、消えない心の傷も負わせてしまった。自然と腕に力が入ってしまう。

急に強くなった腕が気になったのか、少女は俺の顔を伺ってきた。

「ごめん。何でもないよ」

そう言うのと少女はコクリと頷かせ、顔を戻した。それから数分たち、静かな空気が立ち込めてきた頃、突然少女は口を開いた。

「ねえ、貴方の名前は何ていうの?」

「ん?俺は桂だよ」

「けい……。私はフランドール。フランって呼んで」

「ああ……」

またもや沈黙が続く。どうしてこんなにも気まずいのか。まるで付き合います始めたばかりの恋人どうしみたいだ。まあ、どうみても俺達を恋人と間違える人なんていないと思うが。そう考えていると、ドアからノックが三回聴こえてきた。

「失礼します。よく寝れましたでしょうか?」

「……すいません」

「いいわよ。別に」

咲夜さんはフランの様子を伺い、少し困ったような顔をした。きつと咲夜さんも元気になって欲しいんだな。良いメイドさんを持ったなど思っていると、ある事が気になった。

「あの、咲夜さん」

「はい。どうなされましたか?」

「今っってお昼頃ですかね?」

どうもお腹が空いたみたいだ。先程から小さく腹が鳴いている。

「いいえ、今日はもう日が沈みましたよ」

「………え？」

思っていた時間とは全く違い、同様してしまう。よほど疲れていたのであろうか。

「ですから、今日はもう眠りになってください」

「でもさつきまで寝てましたし……」

「今無理にでも寝ておかないと生活バランスを崩してしまいます

よ。それでは、妹様と一緒におやすみなさい」

素晴らしいその場から消える咲夜さん。

「フラン。寝れるか？」

「………無理」

七話 恐怖

「ねえ、桂の事聞かせてよ」

突然の事だった。咲夜さんに睡眠をとれと言われて渋々ベットに横になった時、フランが隣に寝転がり突然聞いてきた。

「突然言われても何を言えば……」

「なんでもいいから、ね？お願い」

毛布を被って俺にくっついてくるフラン。とても楽しそうに、目を輝かせて此方を見ている。そんなフランの表情は、嬉しそうに口元を緩めて笑っていた。

初めて見た表情だ。会ってから一日もたっていないが、フランがこんなにも嬉しそうな表情をするとは思わなかった。これが本当の彼女なのだろうか。

「そうだな……。なあ、フラン」

「なあに？」

「紅葉は見たことあるか？」

「紅……葉……?」

「ああ。秋の季節になるとな、木の葉っぱの色が赤とか黄色に変わるんだよ。それを紅葉っていうんだ」

少し表情が暗くなるフラン。小さな手を握りしめている。

「……私、お外に出たことないから分からない」

「あ……」

話題の選択を間違ったか。今日、咲夜さんと館の廊下を一緒に歩いている時に聞いたのだ。フランが四百年以上の間外にも出られずに監禁されていた事を。監禁と言っても全く出られないという訳ではなく、フランの精神状態が安定している時は出られるという条件付きだった。しかし、フラン自信が誰も傷つけないと言って、自分の意志で殆ど部屋の外に出なかったのだとか。

「ならさ、フランが外に出られるようになったら一緒に見に行こうか」

「え、ほんと!？」

ニパツと笑い、目を大きく見開き目を光らせた。相当嬉しいのだろう。

「じゃ、じゃあき、そ、その時になったら皆いつしよに——ッ!」
フランは何かを言いかけたとたん、フランが息を荒くしてうずくまった。

「け、けいつ、は、離れてっ!」

苦しそうに喋るフラン。口元から牙を覗かせ、七色の羽を大きく広げた。真紅の目はより一層赤みをまして、血のように紅くなっていた。それと同時に背中から大量の汗が噴き出してくる。あの時の恐怖だ。

「——ッ!!——ッ!!……はあ、はあ」

しかし直ぐに力が緩み、フランは息を荒げて仰向けに寝転がった。フランの顔を覗くと、額から汗を流していた。

「ふ、フラン。どうしたんだ?」

「突然、狂気が沸いてきたの。私ね、興奮しすぎちゃうとこうなっちゃうの。ね、ねえ、桂」

何かに怯えるフランの目。体が震えている。どうしてしまったのか。

「何?」

「こ、怖かった?も、もう私と関わりたくない?」

そういう事か。フランはこの狂気のせいで、俺がいなくなってしまうと思っっているらしい。

「…………正直怖かった」

「うっ…………」

突然流れ出す涙。そして、激しくなる身体の震え。

「…………でも、俺はフランに償わなきゃいけないし、それに、いつか紅葉と一緒に見に行くって言ったじゃないか。いなくなったりしないよ」

「ほ、ほんと!?良かったあ」

細い腕を背中にまわして、抱きついてくるフラン。さっきの震えは完全に止まっていた。しかし、涙がとまらないのか、シャツごしに胸

辺りが濡れるのを感じた。

今日一日でフランの事が少しわかった気がする。

彼女は強い。でも、弱いのだ。それに、とても優しい。

でも、フランは

自分の周りに人がいなくなるのを一番怖がっている。体の震えが止まらなくなるほどに。

「ほら、今日はもう寝ような」

「……うん」

「寝れないなら子守唄でも歌ってやろうか」

コクリと頷く彼女。悲しそうな表情から、少し笑みを見せた。

「ねんねくん、ころりく……」

「ふふふ、あはははっ」

突然吹き出すフラン。もう完全に先程の悲しそうな表情は見せていない。

「桂、ヘタクソだよ……」

「そうか？ほら、寝るまで歌ってやるよ」

始めは笑い続けていたフランだったが、時間がたつにつれ笑い声が小さくなり、俺が満足し終えるまで歌った後には、ぐっすりと眠ってしまった。

ここで少し感動してしまう自分がいる。家族や友人の間では音痴呼ばわりされていたが、どうやら子守唄で寝せる事ができるようだ。この期に歌の練習でもしようか。

そんな事を思いながら自分も横になり、眠りつく準備を始めた。

寝れないんですけどね。どうしようか。とても暇だ。

部屋はもう真っ暗で、少し肌寒むい。ここで自分が毛布を被っていない事に気がつき、隣で寝ているフランを起こさぬようにと慎重に、

足から順に毛布の中へと入れていった。

中はフランが入っていたお陰か、とても温かく、それだけで眠れそうだった。そしてウトウトとし始めた時、異変が起こる。フランの小さな手が、俺の体をまさぐって来たのだ。いったいどんな夢を見ているのだろうか。

「むにやむにや……けい……お姉さま……」

フランの手は止まらず、体のいたるところをさわってくる。そして、ついにあそこをさわり始めた。そう、男の股間。ズボン越しに、小さな手が軽く握ったりしてくるのが感じられる。

狙ってやっているのだろうか。生憎小さな子で興奮したりしないので、別にどうって事ないのだが。

ないのだが……

ヤバい。もう少しで警察に捕まる。俺、我慢しろ。相手は子供だぞ。……でも、四百年以上生きてらっしゃるんですね。これって合法……ダメだダメだ。

そんなこんなで脳内で格闘している時、事は起きた。フランの小さな手がボールの方を触り始め、そして……手を握る力をいきなり強めた。

「あ”あ”あ”あ”あ”あああ”っ!!?」

とある館の一室の大きなベットの所で、一人の男は昇天した。

八話 ナニカ

「ん．．．．．？」

窓越しから微かに聴こえる鳥の囀りで起きた。何時もとは違う大きなベット。そのベットには大きな枕が二つあり、その内の一つに私は頭を置いていた。ポカポカと温かい毛布から身体を起こして、ポーツとする頭を朝の冷たい空気に晒していた。

部屋の気温に少し肌寒さを感じている時、ある事に気がつく。昨日私を救いだしてくれた人。私が寝るまで一緒にいてくれた人。桂がないのだ。

「あれ!？」

胸の奥で一瞬ズキツとした孤独感に見舞われる。また一人になってしまうのかと思ったが、そんな事を気にしなくても彼はちゃんとした。彼は床に寝そべっていて、何故か股間を押さえている。寝ている間に落ちてしまったのだろうか。

体を動かして彼のそばに寝転がった。ベットとは違った床の固さが伝わってくる。

「あ、あれ．．．？」

何故だろうか。彼のそばにいるとなんだか胸がドキドキして、不思議とずっとそばにいたいと思ってしまう。それに誰にもこの場所を渡したくないという独占欲も芽生え、体がだんだんと暑くなってきた。

いままで感じた事のない感情。彼の側にいるだけでこんなにも幸福感を味わう事ができるなんて思いもしなかった。

幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。

脳裏に何度も何度も浮かび上がり、その幸せが心を満たして行くのを感じた。昨日はこんな事感じなかったのに、何故いきなりこんな風になったのだろうか。

「桂．．．．．桂．．．．．ふふっ」

桂の寝顔可愛いなあ。ずっと見ていたい。ずっと側にいたい。桂は私の事をどう思ってるのかな。ずっと側に居たいって思ってくれ

てるかな。

「ふふふつ、アハハハハッ」

彼女の中に眠るナニカが目を覚ました。

「ん．．．．．」

「あ、おはよう！桂！」

「．．．．．おはよう」

フランの顔を見て昨日の事を思い出した。その事を思い出したせいか、フランの顔が見ずらい。

昨日の最後もしフランが俺の玉を握らなかつたら 俺は独房行きだった。犯罪を犯す前に気絶できてラッキーだったのだろうか。とてつもなく痛かった覚えがあるが。

「ねえ、桂。ずっと一緒にイテくれルよネ？」

「あ、ああ．．．．．？」

それにしてもやけに嬉しそうだ。そして、とても元気だ。でも、何故目が濁って見えるのだろうか。

「私思ったの。ずっとズツと桂と一緒に暮らしたいなって。そしてね、桂のコトもつと知りたいナ。全部、全部．．．．．ふふっ」

「フラン、まさか」

もしかして狂気に飲まれている？でも俺を殺しに来るような感じはない。でも何故こんなにもフランから違和感を感じ取ってしまうのだろうか。狂気とは違うナニか。

「ケ、ケイ、もつと桂がホシイよお。だから、もつと桂を感じサセテ頂戴」

「ちよ、ふ、フランっ!？」

不意に両手で顔を固定される。もの凄い力が入っているのか、顔を微々たりとも動かす事ができない。

「一緒に幸せにナロ？」

ゆつくりとフランの唇が迫まってくる。急な出来事に少しパニックを起こしてしまっているが、そんな時も彼女の唇が徐々に迫ってくる。そして、彼女と接吻をした。唇どうしを合わせるだけではなく、フランの舌が俺の唇を無理やりこじ開け、舌と舌を絡ませるキス。ディープキスと言われるものだ。

体を動かさなければ、口は塞がれ止めろとも言いう事ができない。

一体彼女は どうして しまった の だろう か。 そんな 感情 が 渦巻 き 始 め た。

九話 濁り

舌の絡み合いが続き、自分の抵抗心がなくなった頃、ようやく彼女が口を離した。自分と彼女の混ざった涎が、彼女の口元から銀色の糸のように垂れた。口を犯され、ブーツとした意思の中彼女は不適に笑う。

小さな指先で、自分の口元に付いてしまっている涎を拭き取り、それを彼女は舐めた。

「えへへへ．．．．．」

満足の笑みで此方を見るフランの目はまだ濁っていた。

「なんでこんなことを．．．．．？」

「え？だって桂はワタシとずっと一緒にいてくれるんでしょ？」

「だからってこんなこと．．．．．」

「あつ！そうだ！」

何かを閃いたのか、手をあわせて顔から笑みを溢す。

「ねえ、知ってる？吸血鬼ってね、補食対象からパートナーを選んで下僕にする事があるんだって」

「．．．．．」

つまり彼女が今からしようとしていることは容易に理解できる。俺を下僕にする気だ。

フランが何故このような事をしようとしているのかが俺には分からない。フランを狂気の中に吞ませてしまったと思われる俺の能力はパチユリーさんに封じられているはず。それなのに、フランはこうして”異常”な行動をしている。

考えれば考えるほど、謎が深まっていくだけだった。

「それじゃあ、さっそく．．．」

フランの吐息が俺の首をなぞる。彼女は舌を出して俺の首を舐め始めた。くすぐったい感覚が広がり、やがてチクリとした痛みが襲った。その痛みと同時にゾワリとする快楽が込み上げる。

「あつ．．．．．」

力も声も出ずに彼女に吸血される。血を吸われるたびになんとも

言えない快樂の波が押し寄せてくる。何度も何度も吸われ、氣を失いかける頃にやっと終わった。どんとんと薄れていく意識の中で彼女が囁く。

「ふふ、次に目覚める頃には一生私と一緒にいられる身体になるから楽しみにシテテネ。オヤスミ、ケイ」

意識を手離す寸前に見た彼女の目は濁っていた。

「それで、魔法は上手くいったのかしらパチエ」

「正直言って七割成功って感じかしらね」

「おや、随分と低いじゃない」

「専門分野じゃないのよ。分かかって言っているでしょ？レミイ」
何千冊もの本が存在する大図書館で、二人の少女がテーブルを挟んで向かい合っていた。片方は、図書館の主パチュリー・ノーレッジ。もう片方は悪魔の住む館といわれる紅魔館の主レミリア・スカーレット。二人の関係は、会話の中で愛称で呼び合う事からどのような関係なのか容易に想像できる。

「でもまあ、彼に悪いことしたかしら」

両手で開いていた本を閉じ、椅子に腰を掛けながらぼそりと話すパチュリー。その様子を伺うレミリアは疑問を抱きながら聞いていた。
「彼には全部が全部封印できたわけじゃないって言って無かったのよね」

「まあ……あの状況で言われても困るだろうしね」

「そういえば彼は今どうしているのかしら。また襲われていたりして」

「それは大丈夫よ。彼の生きている運命がちゃんと見えたから」

十話 滴る血

酷い喉の乾きで目覚める。焼けつくような喉の乾きは、目覚めたての体に鞭を振るった。今までに体験したことのない乾きは、もはや喉が渴いているというよりも、内側から喉をかきむしっているような痛みだった。

「あつ・・・ああ・・・!!?」

喉の痛みにも必死に耐えながら、あることに気がつく。

床でもがき苦しんでいる俺を楽しげに見つめている少女。フランだ。

彼女はベッドに座り、枕を両手で抱いている。

「おはよう。調子はどうかな?ちゃんと上手くいったかな?」

彼女はいったい何を言っているのだろうか。上手くいった?何の事だ?

「あー。何か苦しそうにしてると思ったら、喉が渴いたのね。じゃあ、私のをアゲル」

フランは口元を吊り上げ、自身の足の親指を軽く切った。そこからじわりと血が垂れ、その瞬間、自分の心臓が大きく鳴った。ドクン、ドクンと打ち続け、目の前の滴る血に釘付けになる。

血が飲みたい。血を舐めたい。血、血、血、血。

俺はどうしてしまったのだろうか。先程よりも喉の痛みが増し、目の前の血以外に目が行かない。そして、それを俺は飲みたがっている。

「うふふふ、あははっ」

彼女が無邪気に笑う。でも、目は狂気に満ちていた。

「ねえ、舐めたい?舐めたいよね?」

血が垂れる爪先を俺の鼻に近づけて聞いてくる。それに対して俺は無意識に頷いていた。

「いいよ。好きなだけ舐めて」

そう彼女が言ったと同時に俺は無我夢中で少女の足を舐めた。血の味が舌を犯し、それを飲み干すと喉の痛みが引き、もっと飲みたい

という衝動に刈られる。じわじわと涌き出る唾液が、卑猥な音を立てて少女の血と交わる。

血を飲み込むたびに訪れる快感が脳に響き、脳がまた血を求めて快感を産み出す。それを何回も何回も繰り返す内に、少女の爪先から出していた血が止まった。それと同時に快感が止む。そして感じる絶望。

俺は何をしていたのだろうか。少女に見下されながら、少女の足を無我夢中で舐め続け、仕舞いにはそれが快感になっていた。ここで今までに少女に抱いた事の無い感情が渦を巻いて沸き上がった。少女に対する怒り。そう、俺は少女に怒っている。流石にプライドが許さなかったのだ。

「……どーしたのかなあ?」

ニヤニヤと口元を緩ませて此方を覗く少女。

「……すんなよ」

「……?」

「馬鹿にすんじゃねえ!!」

教えなければならぬ。何処までやってよくて、何処からやつちや駄目か。怒りたくなる事は人それぞれ。俺は見下されるのだけは嫌だ。どんなに好きな人でも家族でも、見下されるのだけは嫌だった。まるで俺の存在を否定されているような気がしてならないから。

俺の叫びは部屋に響き、それに少女は少し驚いた。

「急にどうしたの?」

「フラン、お前に言いたい事があ——!?!」

今抱いている感情をぶちまけようとした時、最後まで言い終える前にある出来事によってそれは遮られた。宙に舞う自分の腕。切り口はスツパリと綺麗に切断されていて、まるで大きな刃物で一気に切り落としたような切り口だった。そこから大量の血が吹き出し、それと同時に右肩からも大量に血が吹き出した。

一瞬何が起きたのか分からず固まってしまったが、何が起こったのかを理解すると、言葉に表せないほどの激痛が俺の身体を襲った。

「あ”あ”あ”あ”あああ!?!」

「痛イノ?でも、ソレはオシオキなんだからね?私の物なんだから、

十一話 朝

紅魔館の主、レミリア・スカーレットは頭を悩ませた。

桂という名の男。彼は他の人間と共に妹であるフランドールの私室へと幻想入りを果たした。

そして運悪く：いや、必然の出来事であるか。フランは狂い、暴れ、桂以外の命を奪った。そして彼だけが生き残る結果となった。

「桂の能力は…」

わからない。圧倒的情報不足である。

そもそも、一度に何人も幻想入りを果たすこと自体おかしなことであるが。それも彼の能力が関係していると考えるのが妥当か。

パチエには能力を抑える魔法を彼に付与してもらい、専門外だとぶつぶつ呟きながらもこなす辺り流石であると言えよう。

魔法の効果は一時的なものである為、定期的にかける必要が出てくる。流石にそれは面倒とパチエが言っていたがそれは主の命令である。実行せよ。

まあ、いずれにせよ私の目には彼が死ぬ未来は今のところあまり見えない。それなら、大丈夫であろう。

それに正直な話、知ったばかりの人間にそこまで情はない。フランが若干気に入っている様に見えるのと咲夜が言っていたが、死んだらそれまでだ。

「最近退屈していたし、丁度いい暇潰しになるか」

そんな事を呟きながらティーカップに注がれた紅茶を飲み干した。

いつの間に気を失っていたのだろうか。目覚めると視界一杯にフランの泣き顔が収められていた。目から零れ落ちる涙を両手で拭いながら、鼻を吸る音が小さく響く。

「フラン…」

彼女の肩がびくりと小さく跳ねた。此方を恐る恐る涙で一杯になった瞳で見つめてきた。

「…ごめんさい」

声を震わせながら口にする謝罪の言葉。それは聞き逃しそうな程小さな声であったが、耳は鮮明に、確実にその言葉を捕らえた。

「しようがないよ」

そういいながらも俺の心臓はばくばくと血液を大量に送り出し始めた。甦る記憶。それは鮮明に脳裏に浮かび、額からは汗がたたりと滑る感触があった。

互いが無言になってから何分たったであろうか。無限にも感じられる時間の最中もずっと俺は気を失う前の事を思い出していた。

切り落とされた筈の手は完全に再生し、部屋の何処を見ても腕は落ちていなかった。だが、赤黒く血痕は残っており、ベットのシーツや床は殺人現場の様な雰囲気を保っている。血の臭いが鼻の奥を刺激し、あれは夢ではなかったと再認識させられる。

「…やっぱり、私は駄目なんだ」

「それは…」

それは俺の能力がしたこと。俺はそう言いたかったのだろうか。途中で声が詰まってしまう。

そもそも、俺の能力って何なんだよ。こうなっているのは全部俺のせいなのか。なんで、なんで、なんでだよ。

どんなに嘆いても現実は甘くはならない。

フランは俺の顔を涙で腫らした目で覗き込んでいた。

とても、なにかを言って欲しそうに。

「フラン、駄目なんかじゃないよ」

そういうと目は相変わらず哀しげだが、口元は小さくにつこりと笑った。

取り敢えず、咲夜さんに事情を話したい。そう思ったとたん、背後からノックがした。

「失礼します…えっ」

部屋の状態を見た時は背中がゾツとした。妹様がまた狂気に犯されてしまったのだろうか。だがそれはとつくに過ぎ去ってしまった事のようにだ。

「あ、あの…」

「は、はい」

「朝食の準備ができましたよ」